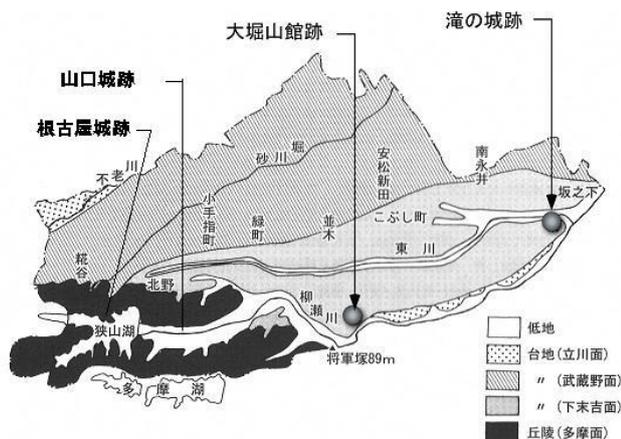


埼玉県指定史跡 滝の城跡

1. 位置と概要

滝の城は所沢市の東部、東川と柳瀬川の合流点に築かれており、南側は高さ約25mの急崖、北側は三重の堀や土塁によって守られています。

本郭・二の郭・三の郭の内郭とそれらを囲む外郭・出郭で構成される多郭式の平山城で、東西350m×南北200mの規模になります。内郭は現在も遺構が良好に残されていることから、大正14年(1925)に埼玉県史跡として文化財指定されています。



2. 歴史と背景

滝の城は関東管領・武蔵守護の山内上杉氏の家臣で、当時武蔵国入間郡・多摩郡に領地を有していた大石氏が15世紀後半に築いたと言われています。

15世紀後半は大石氏の主家である山内上杉氏と江戸城・河越城を築いた太田氏の主家である扇谷上杉氏とは敵対関係にありました。そのため、太田氏の2城を分断するための「境目の城」として築城されたとされています。

この期に乗じて武蔵国に進出してきたのが、伊豆・相模国で勢力を付けてきた北条氏でした。北条氏を危惧した山内・扇谷両上杉氏は古河公方と共に北条氏に対抗しましたが、天文15年(1546)の河越夜戦で敗北し、扇谷上杉氏は滅亡、山内上杉氏は上野から越後へと敗走しました。滝の城は北条氏に接収されて、北条氏康の三男、氏照の持ち城となりました。

その後、滝の城は反北条の太田資正がこもる岩付城への「境目の城」として重要な役割を担い、柳瀬川の対岸(現東京都清瀬市清戸下宿に推定)には番所が置かれ、勝沼・

辛垣城（現東京都青梅市）の三田氏に輪番で警固させていたことが、永禄7年（1564）5月に発給された「清戸三番衆交代命令状」として残されています（青梅市和田家所有）。同年7月には岩付城も北条氏に降り、更に北へ支配が進むと滝の城は「つなぎの城」として、永禄7年（1564）～天正5年（1577）にかけての下野方面への出兵の際には陣揃えの地になったと言われていました「小田原編年録（1812）」。

滝の城の外郭もこの時期に整備され、兵站基地として多くの兵が駐留できるようにしたものと思われます。しかし、天正18年（1590）、滝の城は豊臣秀吉による小田原攻めの際、浅野長政勢の北方からの攻撃を受けて、一日で落城したと言われていました「新編武蔵風土記稿（1830）」。

3. 第10次調査の位置

滝の城跡では過去に民間開発に伴う緊急調査を11回、平成23年度からは整備事業に伴う学術調査を10回行っています。

今年度実施している、整備事業に伴う第10次調査では、二の郭の北東側に位置する部分の中堀を調査しました。

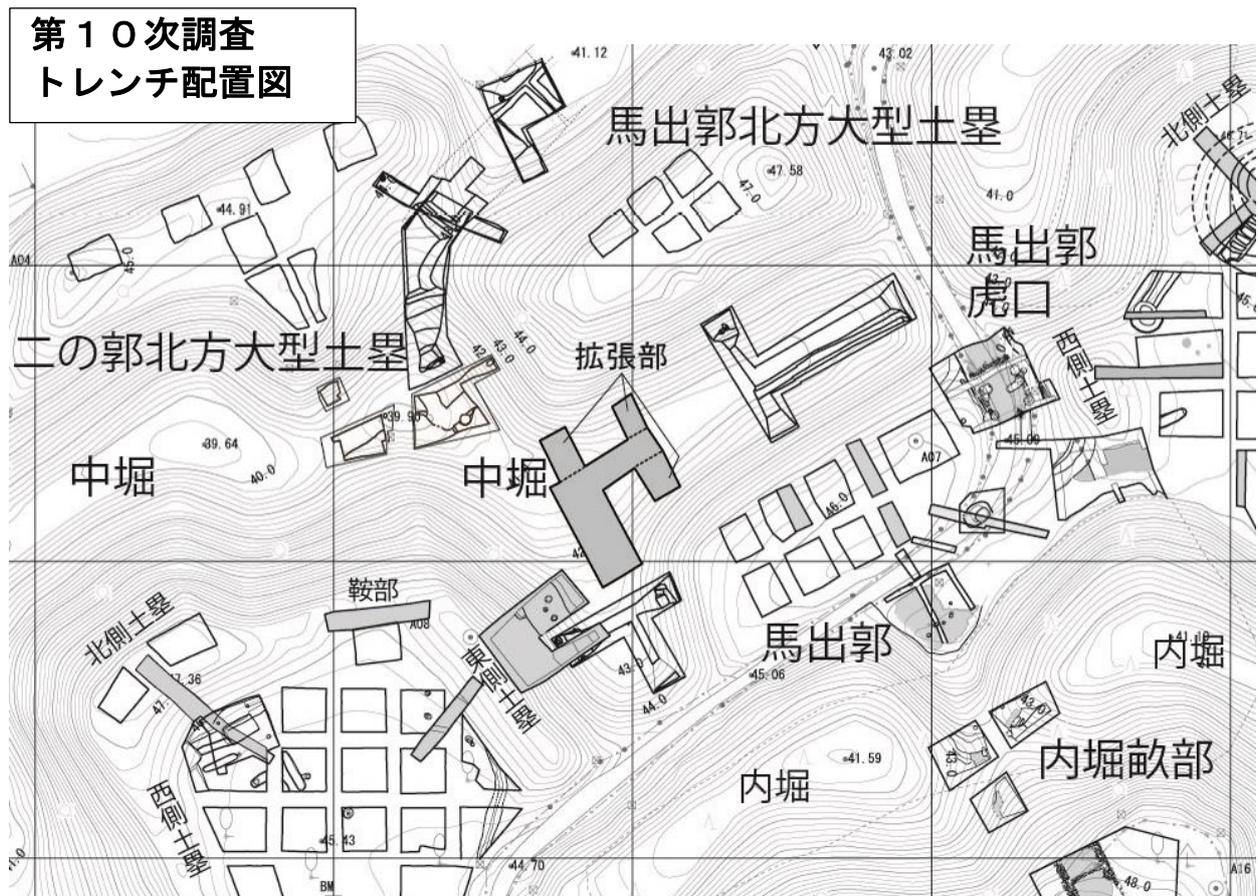
【注意】
外堀、外郭など滝の城址公園以外は個人所有地ですので、立ち入りはご遠慮ください。

第10次調査 調査位置図



4. 発掘調査概要

第10次調査では、南西から北東方向に向かって傾斜する中堀の土層堆積状況などを確認するため、L字型のトレンチ（調査坑）を設けました。また、第6次調査で検出されたテラス状遺構が延伸しているか確認するため当初南西方向に1箇所、調査を進める過程で堀の形状や硬化面の有無を確認する必要が生じたことから北東方向に2箇所、計3箇所の拡張部を設けて掘り下げました。



(1) 遺構

トレンチの北側では現地表面から約1.5～2.15mの深さで堀底が確認できました。堀底幅が約3.3mの箱堀で、法面の角度は約50°前後になります。堀底はほぼ平坦でほとんど高低差はありませんが、ごくわずかに東側へ行くにつれて低くなります（1mで2cmずつ下がっていきます）。一方でトレンチの西側から南側にかけては堀底が急に深くなります。確認できた範囲で浅い部分の堀底から約1.2mも下がります。また、法面は約65～75°の角度で傾斜が急になります。この急に深くなっている堀底部分は浅い

堀底の高さまで黒色土にロームブロックが多く混ざった土などを入れて、人為的に突き固めて埋め戻されています。

浅い部分の堀底の上には目立った腐植土はなく、ローム粒子に小さめのロームブロックが混ざった土が80～100cmほど堆積します。これらは人為的に堀を埋め戻した土だと思われそうですが、ただ土を流し込んでいるだけで突き固めてはいません。また、トレンチのL字に屈曲する辺りでは階段状の硬化面を3面確認しました。前述の埋戻し土が固まって硬化しているため、埋戻しの際に設けられた作業用階段の可能性があります。

現地表面から、浅い部分では約90cmの深さでローム層（地山）を掘り込んだテラス状遺構を確認しました。第6次調査でも同様のテラスを検出していましたが、今回の調査で二の郭の手前まで延伸していることを確認しました。テラスとほぼ同じ高さの、堀が埋め戻された部分では層厚約5～12cmの硬化面を確認し、場所によってはこの硬化面が上下2面に分かれます。また、テラスの直上にも硬化面があることを確認しました。この硬化面は南側に行くにつれて標高が高くなっていきます。この硬化面は城が機能していた際の最後の堀底（北条氏が支配していた段階）に当たる可能性があります。

テラス直上の硬化面の上にはロームブロック混じりの土が確認できます。これも埋戻し土だと思われそうですが、恐らく廃城後に埋め戻されたものではないかと考えています。また、この土の上にもわずかに硬化面が見られる箇所がありますが、近世以降の堀底道として活用されていたようです。

（2）遺物

トレンチの主に上層から、かわらけ（土師質土器）、板碑片などが出土しました。かわらけの中には扇谷上杉系のいわゆるウズマキカワラケも見られます。また、板碑片には、阿弥陀三尊を梵字で表した脇侍種子（サク：勢至菩薩）が刻まれています。

5. 発掘調査の成果と今後

今回の調査では、大型土塁と馬出に挟まれている部分の中堀堀底よりも、二の郭と馬出に挟まれている部分の堀底の方が深くなることが分かりました。堀は人為的に埋められ、第6次調査で検出したテラス状遺構が馬出の周囲を廻るように存在し、同じ高さで硬化面が存在することも確認しました。堀の形成段階の考察が今後の検討課題です。